

こやのせだより

自分・状況を知る (自己認識)
 決める・行動する (自己決定)
 振り返る・伝える (自己創出)

令和3年7月20日
 北九州市立木屋瀬小学校
 校長 瀧上 正彦

1 学期:with コロナ感染対策のご協力に感謝

令和3年度 with コロナの1学期が終わりました。皆様のご協力のおかげで、無事に1学期を終えることができました。昨年度は夏休みが11日間しかなく大変つらい日々を過ごしました。今年度も、プールや学習参観、行事や集会などの制限はありましたが、子どもたちの今しかできない体験を昨年度よりは行うことができました。皆様のご協力のおかげです。改めて感謝申し上げます。しかし、新型コロナウイルスは今だに猛威を振るい、変異種も広がっています。このまま、感染者が増えればまた緊急事態宣言が出されるかもしれません。夏休み中は、ご家庭において、子ども自身が感染対策ができるようコントロールしていただけたらと思います。

そこで、対策として学校から、夏休みのはじめとおわり1週間(計2週間分)の「生活がんばりカード」をお渡しします。「生活がんばりカード」を活用して、家族で話し合い、子ども自身が1日の過ごし方コントロールできるようにしていただけたらと思います。また、毎日チェックして声掛けをお願いします。

1 1学期に「創り出した」モノとは？

①学年末の自分のゴールの姿を確認した

1学期に行ったのは、ゴール設定です。学年末3月に自分たちがどんな姿になっているのか、目標を定め、そのために何をどのようにすればよいか考えさせました。(各学年の目標はHP)

②子ども主体のプロジェクトが動き出した

サイエンスやスポーツ、アート、パーソナリティ、プロテクティブという5つの分野でプロジェクトチームが動き出しています。さらに6年生は世界体操・新体操北九州市大会に向けて木屋瀬小学校のよさをアピールしました。

③ノートコンクール・科学フェスタを行った

自らの学びを表出するノートコンクールを行いました。また、7月31日土曜日18時～こやのせ座において、木屋瀬小学校の自学や自由研究をオンライン発表する科学フェスタを行います。視聴希望は裏面のQRコードで申し込みしてください。市内の小学校、全国の先生方にも案内しています。

2 2学期に「創り出す」モノとは？

①10月末；新しい運動会→スポーツフェスタ

コロナ禍で思うように行事が組めない中だからこそ、木屋瀬小学校は新しい行事の在り方を模索します。そこで、これまでの運動会を一度変えてみようと思います。まず、教師の号令の下で行う運動会から、子どもが自ら考えて動く主体性のある運動会に変えようと思っています。競技も「走と競争遊戯」を組み合わせ新しい競技を創り出そうとしています。

従来の運動会	新たなスポフェス
教師が全てプランニング	高学年児童は自らプランニング
教師が呼びかける	児童が呼びかける
2週間で鍛えるダンス	年間通して楽しくダンス
走るだけのかけっこ	競遊と組み合わせるかけっこ
勝ち負けにこだわる	主体性・協力にこだわる
教師の指示通りやり抜く	児童プロジェクトチームが考えて創り出す(高)
見栄えが良い	見栄えが悪いかもしれない
つらくても頑張る	全ての子が運動を楽しむ

②自学コンクール・学びフェスタに向かう活動

木屋瀬小は自学をする学校として全国に認知されました。しかし、まだ全員の取組とは言えません。そこで自学コンクールを行い自学の輪を広げます。

宿題と自学では子どもが伸びる力は大きく異なります。させられる学習から自ら行う学習へ変換すること。これが今年の大改革の柱「新しい自分を創り出す」です。

さらに、3学期には、保護者の方を学年ごとにお呼びして、学びフェスタを行います。学年で最も力を入れて追究した学びをまとめ発表します。2学期は実行する学期です。

シリーズ 子育て応援 ～校長の独り言～

ほめ力

東京大学名誉教授・工学博士

元ハーバード大学大学院准教授 柳沢幸雄著

〇子どもを伸ばすカギは、親の「ほめ力」にある！

私がアメリカで見てきた子育てでは、まさにほめる子育てでした。アメリカの親たち、先生たちは、子どものことを本当によくほめます。そして、叱ることはほめることに比べるとずっと少ないのです。

日本はどちらかというとその逆で、赤ちゃん時代にはできていたほめる子育てが、子どもが大きくなるにつれ、だんだんと「叱る」子育てになってしまうのです。

ほめる子育てと、その逆の叱る子育てでどのような違いがあるか、例えば子どもに薪割りを教えることになったと仮定して考えてみましょう。

A君のお母さんは、まず自分でお手本を見せました。また危険がないように、斧の安全な使い方を、しっかりと説明しました。そして子どもの手を持ちながらいっしょに薪を割ります。何本か割ったら「ひとりでやってみようか？」と聞きました。子どもは「うん」と答えました。

はじめは、きれいに真ん中で割れませんが、でもお母さんはこう言いました。「うまいわ。その調子よ」そうするうちに、薪がきれいに真ん中に割れました。お母さんは言います。「まあ上手に割れた！お父さんにも見せたいわ」もうその子は、薪割りが楽しくて仕方がありません。残りの薪を全部ひとりで割ってしまいました。

B君のお母さんは、真ん中できれいに割れないときについて我慢できず「なんできれいに二つに割れないの?!」「そうじゃなくて真ん中できれいに割るの！」と怒ってしまいました。子どもは、薪割りなんてもうしたくないと思ってしまいました。

C君のお母さんは、「薪割りなんて危ないこと、絶対にさせられない。もしケガをしたらどうするの」と言って全く薪割りをさせませんでした。

子どもが最も早く薪割りを覚えるのは、A君のお母さんのやり方です。そして、A君は薪割りを覚えるのと同時に、「自分の役割」ができたことで自信を持ち、「自分は必要とされている」と自己を評価するでしょう。私がアメリカで見てきた子育てはこうしたやり方です。

アメリカでは子どもや学生は、みな自分に「自信」を持っています。日本の子どもや学生との大きな違いが、この「自信」なのです。